

A1 国語

(五〇分)

答はすべて

解 答 用 紙

に書き入れること。

〔注意〕 字数制限のある問題は、テン・マル・カッコなどの記号も一字として答えなさい。

一 次の文章は、高見順の小説『わが胸の底のここには』の一節です。本文中の「私」は、中学校が今とちがって五年制だった大正時代に、東京府立第一中学校に入学しました。これを読んで、後の問に答えなさい。

中学生というものは、どこの中学校のでも、その教師たちに必ずあだ名をつけないではおかないが、そのあだ名のなかには、あだ名をつけられた当の教師のシタ^①をも巻かせないではおかないの機知に富んだものをしばしば見出すのである。当時の一中の校長は「ギャボ」というあだ名をつけられていたが、それは「逆蛭」の略で、蛭は尻が光っているのに校長は頭が光っているところから来たものであった。図画の出歯の先生は鼻(花)より先に歯(葉)が出ているというわけで、「山桜」というあだ名だったが、実にどうもうまいものだ。人のいい中老の体操の先生は「豚ちゃん」という、むしろ愛称に近いあだ名をつけられていたが、小柄で肥ったその肉体から来たもので、これはまた平凡だった。

この豚ちゃんは剣道の師範をも兼任していたのだが、その技の進んだ上級生を相手にすると、お面！ 胴！ を盛んに食って、師範の面目は台なしだった。そんなときは、ホイ、一休みと言って、一面をぬいで、薄い半白の髪をべたりと撫でつけた頭からもうもうと湯気を立ちのぼらせて、

「ふむ。なかなかの上達だ。ふむ」

負け惜しみのクチ^②ヨウでなくそう言って、ニコニコしていた。なんとも言えない好々爺^{こうこうや}(「人のいいおじいさん」)ぶりであった。教師というより、おじさんといった感じで、

「おじさん、——はい、手拭い」

と、その豚ちゃんが赤い首を撫でくり回している汚い煮しめたような手拭いの代わりに、できれば氷で冷やした真白なタオルでも持つて行ってあげたいような気がするのだった。

その豚ちゃんは、どっちの足だったか、足の指が無かった。いや、無いのを誰も見たという者は無いのだが、足指の無い人に特有のその歩きぶりから、そして夏でも白足袋^{しろたび}を穿いて道場に立っていることから、つまり無いのを隠していることからしてかえって見たよりも確実に、そう信ぜられていた。

ある日、道場で、

「よし、俺がたしかめてみる」

と言いつ出す者があった。豚ちゃんに体当たりでぶつかって行って綿が詰めてあるらしい足袋の先を踏んづけてみようというのだ。その「冒険」は中学生たちの心を湧かせた。

「やれ、やれ」

「やって見ろよ」

声援のやじ馬の中には私も加わっていた。

「よせよ、そんなこと」

とめる者もいて、それはいいよ悪戯心を煽るのだった。

¹「よせよ。悪いよ」

「悪い？」

とめた生徒は、この臆病者！ といったシ^③センを浴びなくてはならなかった。

「やれ、やれ、悪いもんか」

するとまたひとりが言った。

「教師を侮蔑した(「ばかにした」というかど(「理由」で停学でも食ったらどうする」

「かまうもんか！」

と言いつ出し手は決然として言った。こうなるといいよ中学生の「勇氣」は煽られる。彼はもはや選ばれた栄ある「りっぱ

A2 国 語

な」チャンピオンであつた。

彼は豚ちゃんの前に進み出た。その背には得意の表情をたたえ正面は狡猾な慰懃さ（「しづるがしこく礼儀正しい態度」で、お願いいたします、——その意味のお辞儀をした。私には彼のその「勇氣」が無かつたが、彼のオツチヨコチヨイのなかに私は自分のオツチヨコチヨイを託すことによつて彼の内に自分を見ていた。

「さあ、来い」

豚ちゃんは無邪気な声を出して竹刀を振った。齡のためかいくぶん前こごみの姿勢だつた。

「さあ、元氣出して、打ってこい」

齡の割には若い、むしろ子供のような甲高い声だつた。

固唾を吞んで私たちは見守つた。

「お面！」

「まだまだ。——それ、籠手がア④⑤いてる。それ、お面。——元氣が無いぞ、元氣が」

はい、元氣出してやります、そう言わんばかりに、しやにむに打ってかかつた。

「よしよし、その意氣。さあ、こい」

謀られるとは知らず、豚ちゃんは相手の元氣を、——乱暴を募らせた。

「お面！」

そのまま、悪辣な（「たちの悪い」）チャンピオンは肥つた豚ちゃんの身体にぶつかつて行つた。

やつた！

さすがに彼は竹刀をおさめた。ドギマギしたふうの豚ちゃんに、彼はお辞儀をして、ひきさがつた。

——息を切らしながらの報告はこうだつた。

「まるで、君、手ごたえ、おツと足ごたえが無くて、こうグニヤリと、いやフワリとして、——氣味が悪かつたぞ」

陰險な好奇心を燃やしていた私だつたが、彼のその言葉を耳にすると、罪のない蛙でもこの自分が踏んづけたような何か生理的な不快を覚えた。

豚ちゃんは何事もなかつたかのように他の生徒とまた竹刀をまじえていた。

「指が、みんな無いのか？」誰かが尋ねた。

「うん、無いな」

「どの辺から無いんだ」

「うん。指のところから無いな」

私はなんだか氣持ちが悪くなつてきて、その場を離れようとする、私のうしろに立つた背の高い生徒が、入れちがえに進み出て、

「おい！」

籠手をつけた手で、そのあくどい悪戯者の胸を荒く突いた。

「おい！ 一丁やろう」

竹刀で床を威嚇的に（「おどすように」）トンと叩いた。

「僕、もう、いやだ」

悪戯者は、ひるんだ。「豚ちゃんとやって、もう、くたびれちゃつた」

級でも有数の強い相手なので、そう言つて避けたのだが、

「逃げるな。さあ、立て。正々堂々と勝負しろ」

挑まれて余儀なく立ち向かつた。挑戦者の竹刀にはそれこそ殺氣に近い怒氣が漲つていて、はじめから悪戯者のほうはたじたじの格好だつた。

「お面！」

④ピシリという音が小氣味よく、——だが叩かれたほうの身になればさぞ痛かつたろうと思われる、そしてあの焦げくさいよ

A3 国語

うな臭い^{にお}がはたで見ている者の鼻にさえツンと感じられる、徹底的な音^{てつていき}が道場中に響いた。
くらくらとしたふうで、よろめくと、つづけて、

「お籠手！ お面！」

そしてどんと猛烈な体当たり。

ついさつき豚ちゃんに悪戯の体当たりをしかけた悪戯者は、すでに道場の壁近くに追いつめられていたが、この時、どすんと壁に背をぶつけて、へたへたとその場に崩折れた。

挑戦者はそれに対してなおも許さず、めったやたらと叩きまくった。

「参った。……」

「だめだ。立て！」

「もうごめん、ごめん」

「何を言うか、こいつ」

豚ちゃんが例の白足袋を穿いた足を不器用に走らせて、こらこらと抑えた。

「こら、道場で喧嘩をしちゃ、いかん！」

豚ちゃんは顔を真赤にして怒った。

「参ったというやつをそう叩いたりしちゃならん。卑怯というもんじゃ、それは！」

「だって、先生」

先生のために膺懲し^{ようちやう}（「こらしめ」）ているのです、——叱られた生徒は言外にその意をふくめて、

「先生。こいつは……」

あとはさすがに口ごもって、

「先生。先生。……」

泣き声^{なみこゑ}になっていた。

——中学三四年の頃だった。

（高見順『わが胸の底のここには』より）

問一 —— 1 「よせよ。悪いよ」とありますが、この生徒は、この悪戯のどういうところが「悪い」と感じているのですか。

六〇字以内で答えなさい。

問二 —— 2 「私には彼のその『勇氣』が無かったが、彼のオツチヨコチヨイのなかに私は自分のオツチヨコチヨイを託すことによつて彼の内に自分を見ていた」という部分からは、この時の「私」のどのような気持ちが読み取れますか。五〇字以内で答えなさい。

問三 —— 3 「罪のない蛙でもこの自分が踏んづけたような何か生理的な不快を覚えた」という表現からは、「私」のどのような気持ちが読み取れますか。四〇字以内で答えなさい。

問四 —— 4 「ピシリという音が小気味よく」とありますが、「私」の耳にそのように聞こえたのはなぜだと思いますか。四〇字以内で答えなさい。

問五 —— 5 「泣き声になっていた」とありますが、先生に叱られた生徒のこの時の気持ちを、想像して答えなさい。

問六 —— ①～④のカタカナの部分で、漢字に改めなさい。一画ずついいねいに書くこと。

A4
国
語

著作権の都合により文章の掲載はできません

